

主 張

共に学び続ける教職員集団

松 田 誠



教育を取り巻く社会情勢は、人口減少や少子・高齢化、経済や社会のグローバル化、急速な技術革新に伴う超スマート社会等が進む中で大きく変化しています。さらに、私たち教職員を取り巻く環境は、経験豊富な教員が大量退職し、若手教員が大量採用され、学校組織における年齢構成が変化し、学校教育における課題が複雑化・多様化しています。また、文部科学省より示された「令和の日本型学校教育」を受け、新しい学習指導要領の下での教育活動を進めながら、「GIGAスクール構想」で整備された一人一台タブレットは、新型コロナウイルス感染症の影響を受け、急速に取組が進みました。

そのような中で、教職員の業務の多忙化・困難化に伴う労働時間の長時間化が指摘され、教職員一人一人の資質の向上及び高い専門性と豊かな人間性を備えた人材の育成・確保が必要となってきます。

私が二〇代の頃は、携帯電話も普及しておらず、この先、教育現場でICT機器を活用して授業を行い、過重労働が問題視される時代になることなど想像できませんでした。今までなら「子供たちのため」という思いをもった教職員が多く、様々な課題がありながらも、仕事にやりがいをもって働いてきたと思います。しかし、これからは、働き方改革としての業務見直し等の課題解決に向けて、校長が指導力を発揮し、計画的に取り組み、人



材育成をしていかなければなりません。

三年前には、新型コロナウイルス感染症に伴う緊急事態宣言が出され、今までに経験したことのない不安な日々を過ごすことになりました。本校では、令和二年度から伊賀市教育委員会の指定推進校として、研究主題を「タブレット端末を活用して、主体的・対話的で深い学びを実現するために」とし、授業改善に取り組んできました。研究を始めるとき、私を含め今までにタブレットを使用したことがない教員は、不安を感じ、基本的なことから学び始める中で、タブレットを使い始めました。経験豊かな教員の「アナログ」と若手教員が得意とするICT機器を使った「デジタル」のよさを合わせた「緑ヶ丘中らしいスタイル」を創っていかうと取組を進め、「子供たちの学びを止めない」ために、タブレットを開き、「学び続ける教員」の姿がありました。私は、そのような姿が、子供たちの学びを支えているのだと実感しました。

様々な世代が新しいことに取り組むことによって、これまでの教育実践の蓄積を引き継ぎつつ、若手の育成という視点ではなく、教員が共に学ぶスタイルを構築することができました。特にこの研究の中心となって推進したメンバーの多くは、教職について一〇年未満の教員でした。五〇代の教員が二〇代からタブレットの使い方の指導を受け、二〇代が五〇代から授業のノウハウなどの指導を受ける姿がありました。さらに、中堅教員がミドルリーダーとして研究紀要等をまとめ、私たち自身が、自ら学びたいと思い、「主体的・対話的で深い学び」を実践することができたのではなかったでしょうか。

現在も、試行錯誤を繰り返しています。そのような子供たちの育ちの中で、私たち教職員集団が、成長した三年間だったと感じています。

(全日中副会長・三重県伊賀市立緑ヶ丘中学校長)